

Title	ウィリアム・ジェイムズの軌跡1：心理学, プラグマティズム, 宗教的経験
Sub Title	An intellectual trajectory of William James 1 : psychology, pragmatism, religious experience
Author	小川 (西秋), 葉子(Yoko Ogawa Nishiaki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2025
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.75 (2025. 3) ,p.23- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：鈴木秀美教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20250300-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・ジェイムズの 軌跡 1

——心理学，プラグマティズム，宗教的経験

小川（西秋）葉子



序：ウィリアム・ジェイムズとプラグマティズムをめぐる3つの誤謬

近年，世界的なレベルで19世紀から20世紀の初頭のアメリカ世紀転換期に活躍した科学者であり思想家でもあるウィリアム・ジェイムズに対する関心の高まりが顕著にみられる（小川〔西秋〕葉子 2021, 2023a, 2023b, 2024）。その過熱ぶりは約半世紀以来のことといっても過言ではない。心理学の始祖として知られるとともに，宗教的経験やプラグマティズムをめぐる講演録によって，ジェイムズは世に広く認知されることとなった。本稿は，このようなジェイムズをめぐるいくつかの誤謬を解消するために，1879年から1907年にわたる彼の思想的な格闘の軌跡をたどるものである。

ジェイムズの思想の位置づけをめぐる一般的な言説においては，次のような3つの誤謬がみられると筆者には思われる。第一に，プラグマティズムに関連する思潮が興隆するうえで，アメリカ国内で最大の死者を生み出した1861年から1865年にかけての南北戦争（the Civil War）が多大な影響をあたえたとするルイ・メナンド（Menand 2011）に対し，そのような影響関係はまったくみられないとするシェリル・ミサック（Misak 2016）の見解である。第二の誤謬とは，プラグマティズムとは，同時代の作家マーク・トウェインによる『金めつき時代（The Gilded Age）』（Twain 1873）にもみられる拝金主義を体現する真のアメリカ的な哲学であるとする認識である。最後に，ジェイムズ自身が論じているように，プラグマティズムとは，彼がそれまで経験についておこなってきた論攷とはまったく無関係であるという主張である。

以上のような諸理解は，次のような理由により，あやまりであると筆者は考える。第一に，南北戦争がプラグマティズムの興隆にあたえた影響は，少なくともひとつは存在し，それは，アメリカ合衆国の金本位制からの脱退とグリーンバックと呼ばれる不換紙幣の発行であろうということである。第二に，プラグマティズム，とりわけ，ウィリアム・ジェイムズの論考は，英国の戯曲家で19世紀にアメリカで高く評価されたウィリアム・シェイクスピアの論調に大きく影響を受けており，『終わりよければすべてよし』（Shakespeare 2016e）といった題名に象徴されるように，英国から輸入された功利主義の主張のひとつである「成果主義」と共鳴するようなむしろヨーロッパの思想的な影響がみられるという点である。最後に，ジェイムズ自身がすでに失念していたと思われるが，1879年の時点で，のちのプラグマティズムの考察にいかされる論点が，ジェイムズの心理学的分析において萌芽していたという事実である。

以上のようなプラグマティズム研究の偏向にみられる3つの誤謬を回避すべく、本稿では、主としてウィリアム・ジェイムズが校正を重ねたのちに出版された著作を、書簡を補足的に参照しつつ丁寧にたどる。それとともに、そこで使用されている術語の含意を、ジェイムズが経験した時代的なコンテキストに立ち戻って考察する。そこで指摘しておかなければならないのは、ジェイムズが、英国の戯曲家ウィリアム・シェイクスピアの名作に親しみ、しかし彼なりの信念とバイアスをもってたえず依拠しつづけることになるという見解である。そこで本稿では、通常のAI分析とはことなる、リズムと強弱とめりはりを意識した方法で、ジェイムズの言説がつくりだす宇宙（the Universe of Discourse）にみられるデザインにアプローチしてゆきたいと考える。

このようなウィリアム・ジェイムズとプラグマティズムをめぐる誤謬をただすために、本稿では、2つの契機に注目する。それによってこれまで注目されてこなかった比較歴史分析の視点から新たなジェイムズ像を描きだすことを試みる。近年のプラグマティズム研究においては、チャールズ・サンダース・パースの再評価の気運の一方で、ジェイムズを過小評価する傾向がみられる（Misak 2020）。しかしながら、筆者の意見としては、そのような狭小な見方は、ジェイムズの思想のキーとなる著作や論述を看過しているためにほかならない。しかも、ジェイムズとパースの違いを際立たせるために両者の共通認識も見のがされている危険性を主張したい。

ウィリアム・ジェイムズの思想的な軌跡を理解するうえで、次のような2つの契機を複数のシェイクスピア作品からの引用によってひとつずつたどってゆくことがよいだろう。それらをここではすべて、数量によって示したいと考える。その理由は、明確さ、かつ、多様さを同時に表現できるためである。

本稿第1節のキーワードは、1879年の最初の4か月である。すなわち、1878年12月に書籍出版の契約をかわしたのち、1879年の1月から4月のあいだに偶然にも継起したできごとによって、ウィリアム・ジェイムズは、『心理学原理』（1890）と『心理学要綱』（1892）にもひきつがれるアイデアをひとつのモチーフとして昇華させたといえよう。それは、「飾りボタン（studs）」「石（stone）」「純金や宝石（shekels）」といった丸い形式のモノを示す用語に縮約される。本稿第2節において中核となるのは、「プライドは凋落をみる（Since pride must have a fall）」という箴言^{しんげん}に端を発する1文である。のちに詳述するように、この2つは当時の社会状況とジェイムズの洞察、そして、その時代にアメリカで上演されたウィリアム・シェイクスピアによる歴史劇『リチャード2世』（Shakespeare 2016a）を包絡する2つの機軸となると考えられる。

第3節では、価格とプライドを包絡すべく、ウィリアム・ジェイムズが経験した思想の変遷過程を心理学とプラグマティズム、そして宗教的経験をつなぐ意味ある筋道にそって再構成してゆく。結では、本稿における推論を、ウィリアム・ジェイムズをめぐる筆者自身がこれまでにおこなってきた諸考察と照らし合わせることを試みる。「事実は小説より奇なり」という格言をはるかに超えるような偶然の出来事のめぐりあわせと積み重ねが、ジェイムズにみられる稀代の思想を形づくった軌跡と奇蹟を、論証するきっかけとしたい。

1：1879年の最初の4か月

ウィリアム・ジェイムズがプラグマティズムを評するうえで用いた「キャッシュ・ヴァリュー、現金価値（cash value）」やそれが「働く、通用する（work）」といった表現（James 1907）は現在においてもいささか奇妙な印象を持って受けとられているといえよう。哲学や思想を語るにとしては、そういった術語は唐突な語感を持つという受容が一般的

であるためである。

本節とそれに続く第2節においては、ジェイムズの言説宇宙のなかでは、なんら矛盾なく、当時の社会状況とジェイムズが精読し朗読してきたウィリアム・シェイクスピアの言説世界が融合した結果として上記の用語が使用されていることを示す。その契機としては、1879年の最初の4か月におこった偶然の所産について述べる必要がある。まず、本節ではジェイムズ自身の『プラグマティズム』からの引用に注目し、出来事と使用単語の連関を探る。

ウィリアム・ジェイムズの真理観は、次のように述べられており、それは、心理学的分析と1907年当時の彼がおかれた状況をほうふつとさせる。

まことに真理は大部分が一種の信用組織によって生きている。我々の思想や信念は、それを拒否するものがない限り、「通用する (pass)」。それはちょうど銀行手形〔銀行紙幣、補足筆者〕がそれを拒む人のないかぎり通用する (bank-notes pass so long as nobody refuses them) のと同じである。しかしこのことはすべて、どこかへ行けば目の前にじかに検証がみられるという默契の上に成り立っているのであって、もしこの検証がなければ、かかる真理の構築は、なんら現金保有の裏付けをもたない (no cash-basis whatever) 金融組織と同じように、たちまち倒壊してしまう。諸君は或ることについて私の検証を受け容れられるし、私は他のことについて諸君の検証を受け容れられる。われわれはお互いの真理を取り引きしているのである。しかしかかる全上部建築の支柱〔全上部構造の取引、補足筆者〕(the posts of the whole superstructure) となっているのは、誰かによって具体的に検証された信念なのである。(James, 梶田訳 1957: 207-208.)

ウィリアム・ジェイムズは、この記述に先立つ約三十年前の1879年における具体的な観察として、次のように論じている。これは、のちに論文の形をへて『心理学原理』および『心理学要綱』の両書において「アソシエーション・連合 (association)」の章に同内容でおさめられる論述である。

例えばちょうどいま (1879年) 掛け時計 (my clock) を見た後、私は最近の上院で決まった紙幣 (our legal tender notes) のことを考えていた。掛け時計はそのチャイム (its gong) を修理した男 (the man) の心像を呼び起こし、彼の心像は私が最後に彼に出会った宝石店 (the jeweler's shop) のことを思い出させ、その店は私がそこで買ったシャツの飾りボタン (some shirt-studs) を思い出させ、飾りボタンは金の価格 (the value of gold) と最近の価値の下落 (its recent decline) を思い出させ、下落はそれと同価値の紙幣 (greenbacks) を思い出させ、それが自然にその通用期間 (how long they were to last) とベイヤード上院議員〔の法案、補足筆者〕(the Bayard proposition) を思い出させたのである。これらの心像はそれぞれの興味がある点を提案する。しかし私の思考の転換点をなす心像は容易につきとめられる。チャイム (gong) がその瞬間には最も興味のある時計の部分であったのである。なぜなら、それは最初の美しい調子 (a beautiful tone) でなっていたのに音色が悪くなり、失望を感じていた (it had become discordant and aroused disappointment) からである。しかし時計は、それを私に送ってくれた友人 (the friend who gave it to me) でも、あるいはその時計に関連している何百の状況内のどれを想起させてもよかったのである。宝石店が飾りボタン (the studs) を思い出させたのは、そのすべての内容の中でこれだけ自己の所有という自己中心的興味 (the egoistic interest of possession) で色づけられているからである。この飾りボタンとその価値 (the studs, their value) に対する興味が、その主な原材料 (the material as its chief source) のことを抽出させ、このようにして思索は続いていったのである。読者は誰でも、ある〔いかなる、補足筆者〕瞬間に〔おいても、補足筆者〕自己に捉えて (arrest himself) 「私はどうしてこのように考えるようになったのだろうか」と自問すれば、複雑に結合した接近線 (line of contiguity) と興味点 (points of interest) によって連鎖している表象の連なりをたどることができるに違いない。これが通常の人々の心 (average minds) に自然に進行している共通観念の連合 (the association of ideas) の過程である。われわれはこれを、普通の連合あるいは混合連合 (ordinary, or mixed, association)、あるいは好むならば部分的想起 (partial recall) と呼ぶことができる。

(James, 今田訳 1993: 51-52)

実際、このようなジェイムズの記述は、1879年の1月から4月にかけてアメリカ合衆国でおこった出来事を反映していると考えられる。まず、1月1日には、南北戦争時に大量に発行されたグリーンバック紙幣を正貨に兌換すべく上院で奮闘したトマス・フランシス・ベイヤード(Thomas Francis Bayard)議員の努力がみのり、銀行券を金貨に交換する銀行業務が再開された(中村 2011: 737-738)。同年2月26日にはジェイムズは、その前年に『反省の哲学』を出版したイギリスの哲学者シャドワース・ホロウェイ・ホッジソンをイマニュエル・カントと比較しつつ、理解しようと書簡に記している(Wahl 2010: 71)。続く3月4日には、グリーンバック紙幣に由来するポピュリスト政党からアメリカ上院議会第46期に13人の議員が送り込まれた会期が始まった(紀平 2022)。

最後に、最も重要と考えられているのが、同年4月23日に起こった暗殺未遂事件である。シカゴのマクヴィッカー劇場で『リチャード2世』を演じていたシェイクスピア俳優エドウィン・ブースに対し一般人が襲撃し発砲する(Forker 2002)。ブースは、ことなきを得るが、これは彼自身の弟ジョン・ウィルクス・ブースが1865年にワシントンで観劇中のエイブラハム・リンカン大統領を暗殺し(Oates 2022)、馬に乗って逃走したのちに、ボーリング・グリーン(Bowling Green)で射殺された奇妙なめぐりあわせを思い起こさせる(中村 2011: 619-620; Sontag 2016: 378-379)。

ジェイムズは、このとき、侵入者が発砲したタイミングでエドウィン・ブースが発していたとされる台詞、すなわちリチャード2世の独白部分と馬丁とのやりとり、前出のホッジソンへの反論となる心理学的な「アソシエーション」の事例を重ねているようである。ジェイムズ自身もリンカンを尊敬する主旨の手紙を1865年の暗殺事件の半年後にしたためていた(Wahl 2010: 49)。また、ジェイムズは、スコットランドの思想家で衣服の哲学や英雄論で知られるトマス・カーライルにならって大量の肖像画コレクションを30歳になるまで続けていたとされる(Wahl 2010: 49)。そのなかには、リンカン像も含まれていただろう。

リンカンが最も好んだシェイクスピア作品が『リチャード2世』であり、この王が廃位するときのヘンリー・ボリングブルック(Henry Bolingbroke)(のちのヘンリー4世[Henry the Fourth])とのやりとりを口唱していたとするならば、ジェイムズがこの作品にひきつけられていたとしても、なんら不思議はない。じっさい、リンカン殺害犯の射殺現場であるボーリング・グリーンと彼の兄が演じる英国王を降位させるボリングブルックという2つの名称の発音は似た響きをもつ。『心理学要綱』の「アソシエーション」の章におけるさきほどの引用の少し後に、ジェイムズは、『リチャード2世』の戯曲に言及している。

もしシェイクスピアの戯曲と言われる前夜に『リチャード2世』を読んでいたとすれば、『ハムレット』や『オセロ』よりもその方が心に浮かんできく。特定領域の興奮、あるいは脳の特定様式の一般的興奮は、その後一種の鋭敏さ、あるいは高められる感受性を残し、これが消滅するには何日かの時間を必要とする。これが持続している間は、その領域あるいはその様式は、ほかの時にこれを刺激しないような原因によって活動させられやすくなっている。したがって、経験が最近(recency)であること(近接性)が考えの再生を決定することにおいて最も主要な要因である。(James, 今田訳 1993: 54)

以上のような時系列的な出来事とジェイムズ自身による「アソシエーション」をひきおこす要因についての説明を鑑みると、ジェイムズが依拠している具体的な材源はウィリアム・シェイクスピアによる、直近にアメリカ合衆国のシカゴで上演されて大反響を巻き起こした『リチャード2世』であると推論することが妥当であろう。

ウィリアム・ジェイムズが「アソシエーション」を説明するうえで引き合いに出した

『リチャード2世』との照合をさらにすすめる前に、それ以外のシェイクスピア作品との連関についても簡単にふれておきたい。なによりも、やはりアメリカで人気を博した『お気に召すまま』(Shakespeare 2016d) 第二幕第一場で、リチャード王同様に、権力を剥奪され、地方におちのび、イングランドのアーデンの森にすむ老侯爵の言葉をここにひく。

老侯爵：(略)

逆境が人に与える教訓〔の効用、補足筆者〕はどうるわしいものはない (Sweet are the uses of adversity), それはガマガエル (the toad) に似て、姿は毒を吐きはするが、その頭にはガマ石という貴重な宝石を蔵しておる (Wears yet a precious jewel in his head)。俗塵を遠くに離れたここでわれらの日々は、樹木にことば〔のスタカート音、補足筆者〕を聞き、せせらぎに書物を見いだし、小石に神の教えを読みとり、森羅万象に善を発見する (Finds tongues in trees, books in the running brooks, Sermons in stones, and good in every thing)。

(Shakespeare, 小田島訳 1983c: 43)

これは、すでに本節で引用したジェイムズの『心理学』における「アソシエーション」を説明する文体とリズムや形式面においてかなりの相同性をみせている。とりわけ、短い文節を積み重ねてゆくスタイルが特徴的であるといえる。

2: 1つの箴言

本節では本稿第1節で引用したウィリアム・ジェイムズの「アソシエーション」に登場する『リチャード2世』の台詞をさらに掘り下げることとする。リチャード王の独白によってジェイムズは有効な事例の発想を得たと考えられる。そこに登場する1つの箴言をメルクマールとして本節を展開することとした。

箴言というのは聖書から引用される名言のことである。「プライドをもつものは墮落する (Since pride must have a fall)」という一文は、自分のかわいがっていた馬が従兄であり、敵となったボリングブルックになついている様子をきかされたりチャードが発する言葉である。これは、聖書の箴言にちなむと考えられる (有馬 2014=2022)。

この「プライド」を「プライス (price)」とよみかえることによって、ジェイムズが「アソシエーション」の事例を考察したのではないかという推測のもと、チャールズ・サンダース・パースとの関係、『リチャード2世』における前提関係、さらには前出の『お気に召すまま』との類似点について考察してゆく。

プラグマティズムの思想家のなかで、ウィリアム・ジェイムズのみがシェイクスピアの発想に感化されていたわけではない。1876年ごろ、ジェイムズに先んじてプラグマティズムの思想を強調し始めたと言われるチャールズ・サンダース・パースという人物がいる (歴史学研究会編 2017: 237)。本稿序で言及したメタフィジカル・クラブにおいて、ジェイムズと交流をあたため、のちに思想的に決別するパースも、1860年以降、3回にわたり「グラッシー、エッセンス (glassy essence)」という用語を使用している。

『シェイクスピア図解ハンドブック』によれば、“glass”には、鏡、未来を示す水晶玉、砂時計という3つの用法がみとれる (Crystal 2015)。しかし、パースの言及する『尺には尺を』(Shakespeare 2016c)でも、主役の語る台詞は聖書からの1つの箴言をもとにしているようである。第二幕第二場において、修道女であるイザベラが不条理な境遇を嘆く台詞にその用語が使用されている。

イザベラ：上に立つ人が雷神ジュピターのように声高に厳罰をふりかざすと、ジュピターも安眠が乱されてしまう。下っ端の小役人まで一人残らず雷を狩り受けようと天 (his heaven) を騒がせるでしょうから。雷だけの世の中になります。慈悲深いジュピター (Merciful heaven)、あなたは

稲妻を伴うすさまじい雷電をもってくさびを打ち込めないこぶだらけの樫の木は引き裂いても、弱い灌木はお見逃しになる。ところが人間は、傲慢な人間は (But man, proud man), 束の間の権威をかさに着て、自分がガラスのようにもろいものであるというたしかな事実も悟らず、まるで怒った猿のように、天に向かって愚かな道化ぶりを演じては天使たちを泣かせてしまいます。もしも天使たちが人間のように笑うことができれば、きっと笑い死になさるでしょう (Most ignorant of what he's most assured, His glassy essence, like an angry ape Plays such fantastic tricks before high heaven As makes the angels weep, who, with our spleens, Would all themselves laugh mortal)。

(Shakespeare, 小田島訳 1983a: 60-61)

ここでも人間の傲慢さ (proud man) が、ジェイムズの興味をひいたと考えられる『リチャード2世』の箴言と共通する含意で使用されている。猿が「首の骨 (neck)」を折るというエピソードについては、同じくシェイクスピアが執筆した『ハムレット』(Shakespeare 2016b) の第三幕第四場において主人公が口にする台詞にあらわれている。

ハムレット：(略)

そう、分別も秘密も投げ捨てて、すべてぶちまけろ。屋根に上って、大切な籠の鳥を逃がせばいいのだ。そして、昔話の猿のように、自分も籠から飛び出してみようと転がり落ちて、首の骨を折るがいい (And break your own neck, down)。

(Shakespeare, 河合訳 2003: 142)

さらに、『尺には尺を』に戻ると、第二幕第二場には「それぞれの好みで高くも安くもなる (whose rates are either rich or poor As fancy values them)」のような性質をもつ純金や石という表現がみられる。それに対して修道女であるイザベラの祈りは「天に昇り夜明け前にそこに入りこむ (That shall be up at heaven and enter there Ere sunrise)」性質をもつと主張される。

イザベラ：と申しまして、純金や、それぞれの好みで高くも安くもなる宝石を差し上げようというわけではありません (Not with fond shekels of the tested gold, Or stones, the rates are either rich or poor As fancy values them)。私がささげられるのは、天にのぼって夜明け前に神のもとにとどく真心こめたお祈りです。汚れを知らぬ魂にお仕えする処女の、身を清めてのお祈りです (but with prayers, That shall be up at heaven and enter there Ere sunrise, prayers from preserved souls, From fasting maids whose minds are dedicate To nothing temporal)。

(Shakespeare, 小田島訳 1983a: 62-63)

「天 (heaven)」と「地獄 (hell)」とは、舞台用語では、それぞれ「天井のすぐ下の舞台」と「奈落と呼ばれる舞台地下」をさすことが多い。シェイクスピアの演劇が上演されるときには、このような上下関係において価値観や魂の下降や上昇が視覚的にも聴覚的にも知覚されやすい形式であっただろう。この「天、天井 (heavens)」をめぐる構成＝集合体の持つ含意については、別稿においてまた言及する。この論点については、本稿第1節のみならず、第2節でも引き続き論じることになる。

もう一度さかのぼって『リチャード2世』から本稿第1節で引用したりチャード王の独白の前後文脈をたどると、すでにボリングブルックが訪れてきた遠征先のウェールズにあるフリント・キャッスルの独白、そして、幽閉されて毒殺の気配に気づいたリチャードが刺される場面での台詞に、上下運動のメタファがみられる。前者については、オウィディウスの『変身物語』にみられる有名な寓話が言及される。それは皆に自慢するために太陽神である父のフィーバスが毎日天空を駆ける馬車を乗りこなそうとした息子のパトエンが望み叶わず墜落するエピソードである (オウィディウス 1981)。

第三幕第三場ではボリングブルックらの裁きを受けるために城の上部から下の庭であり

宮廷ではなく法廷ともなる「下のコート (base court, down court)」に降りていくリチャード王の心境が語られる。この台詞では「天にのぼるヒバリ (mounting larks)」と「夜のフクロウ (night-owls)」の対比が印象的である。

王：降りよう、おりよう、太陽神のフェイトンのように暴れ馬を下ろしかねて、天から地上へまっさかさまにな (Down, down I come, like glis't'ring Phaëton, Wanting the manage of unruly jades)。下のわか？にわかにしたにおりるのだ、王位にある身が謀反人の呼び出しに応じておおいに恩恵を与えるのだから (In the base court: base court where kings grow base, To come at grace)。下の庭か？王が裁きの庭に降りるのだ、揚げヒバリが歌うべきときに夜のフクロウが泣く of the base court, come down: down court, down king, For night-owls shriek where mounting larks should sing)。
(Shakespeare, 小田島訳 1983b: 126)

さらに、『リチャード2世』第五幕第六場に登場するエクストンという人物は、ボリングブルックの臣下である「エクストン候ピアーズ (Sir Pierce of Exton)」を指している。このようにチャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) の名を思わせる綴りは、同時に、リチャードを「眺め、突き刺す (pierce)」ものである。また、天上と地下にわかれるリチャードの魂と肉体をかりうじてつなぎとめる「スタッズ」であり「ピアス・イヤリング (pierced earring)」や「拍車 (spur)」の形状と同様に2枚の金属を1本の軸によって一体化させる構造を持つ。

王：エクストン (Exton)、おまえの手は凶悪に極まるものだぞ、王の血で王の土地を汚すとは。のぼれ、のぼれ、わが魂！おまえの座は天井にある、卑しい肉体はここで死に、地下に沈むことになる (Mount, mount my soul; thy seat is up to on high, Whilst my gross flesh sinks downward here to die)。
(Shakespeare, 小田島訳 1983b: 194)

上記の台詞は、リチャード王がいよいよ命を落とす直前に語られる。この「魂 (soul)」と「座 (seat)」という語は、ウィリアム・ジェイムズが「哲学は魂の座を研究する学問である (Philosophy is to study the seats of the soul)」と述べる (James 1892) ときに念頭にあると考えられる。このようにしてボリングブルックはヘンリー4世として王位を継ぐため、価値が下落した者たち、ここではリチャードを、追いつめ死に至らせる。実は、ボリングブルック自身も後悔を禁じえず向かう先というのは、巡礼の旅である。

以下で引用する『ハムレット』第四幕第五場におけるオフィーリアの歌は、ハムレットの突然の翻意に心の動揺を隠せず唱うものであるが、ここでも巡礼が言及される。この場面における巡礼の行き先というのは、三大聖地のひとつであるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ (Santiago de Compostella) と考えられる。聖人であるヤコブの死骸がおさめられているとされるその地に向かう者たちは、帽子には帆立貝のブローチをつけ、杖とサンダル of the装いによって身を包むことが常である。

オフィーリア：「歌う」ほんとの恋人を、どうやって見分けるの？帽子に貝殻、手には杖、歩く巡礼よ (How should I your true love know From another one?—By his cockle hat and staff, And his sandal shoon)。
(Shakespeare, 河合訳 2003: 158)

本稿第1節で論じた「スタッズ」やガマ石のような意匠と共通する帆立貝は、帽子の中央にはめ込まれるようにつけられる (Crystal 2015)。また、サンティアゴ・デ・コンポステラというこの地の位置は日の沈む西へと続き、リチャード2世の象徴である太陽にも結びついている。

『リチャード2世』第三幕第三場でも本稿第1節で引用したリチャード王の投獄に先立つ場面において、自らの凋落を目の前にした状況で、次のような台詞が語られる。同じく第1節で言及した1879年4月にシカゴで上演された同戯曲で主役を演ずる、エイブラハム・リンカン暗殺者の兄である俳優エドウィン・ブースが襲撃される独白のいくつか前のものである (Forker 2002; Sontag 2016: 378)。

王：おれの宝石のかずかずをロザリオの珠にかえよう、おれの豪華な宮殿を隠者の小屋にかえよう。おれの華やかな衣装を乞食の衣にかえよう、おれの衣装を凝らした金杯を木皿にかえよう、おれの王笏を巡礼の手にする杖にかえよう (I'll give my jewels for a set of beads, My gorgeous palace for a hermitage, My gay apparel for an almsman's gown, My figured goblets for a dish of wood, My sceptre for a palmer's walking staff), おれの無数の臣下たちを一对の聖像にかえよう、そして、おれの大きな王国を小さな墓に、小さな小さな墓に、名も知れぬ墓に変えよう、さもないければおれは、国王行幸の大通りに、人びとの行きかうにぎやかな街路に埋められ、絶えず臣下の足が主君の頭を踏みつけるに任せよう、生きているいま、おれの心を踏みにじるやつらのことだ、埋められたとなると、この頭を踏みつけずにおくものか (My subjects for a pair of carved saints, And my large kingdom for a little grave, A little little grave, an obscure grave; Or I'll be buried in the King's highway, Some way of common trade where subjects' feet May hourly trample on their sovereign's head)。

(Shakespeare, 小田島訳 1983b: 124-12)

この引用の最後の部分にある価値下落の状況もまた印象的である。「臣下の足 (feet)」によってかつての「主君の頭 (head)」は、「民衆たちの往来、トレード (common trade)」において踏みつけられることになると記されている。

3：価値とプライドの相同性

「価値」や「プライド」が下落するという状況はなにも否定的な側面ばかりがあるわけではない。とりわけ、馬の背中から落ちて首の骨を折るという「人馬分離」の状況は、鬱病に悩む患者が、自分が見つめる四つ足の動物から自分自身を引きはなしていく回復のプロセスと酷似しているといえる。

前節でふれた巡礼の経験に関連して、ウィリアム・ジェイムズは、『宗教的経験の諸相』(1902)において、17世紀にイギリスで出版された著名な回心と帰依の書である『天路歷程 (The Pilgrim's Progress)』(Banyan 1678)を執筆したジョン・バニヤンについても詳細に論じている。

(略)そして二週間後には、真理に関する私自身の積極的な精神的暗示を持ちはじめましたが、これらの暗示は、私にとって踏み石 (stepping-stones) のようなものでした。それらの暗示をいくつか、ここに記しておきます。いずれも二週間のあいだにおいて、浮かんだものです。

「第一。私は魂である (I am Soul)。ゆえに、わたしはもう大丈夫だ。

「第二。私は魂である。ゆえに、私は健康グレイシになっている。

「第三。私自身を見る一種の内的な目こぶに、私が患っていた身体の部分すべてに瘤をもち、私と同じ顔をした四本足の動物があらわれて、それが私自身だと認めるように私に求めた (A sort of inner vision of myself as a four-footed beast with a protuberance on every part of my body where I had suffering, with my own face, begging me to acknowledge it as myself)。私は断固として、私が健康であることに私の注意を集中して、そのような姿をした昔の私自身を見ることさえ拒んだ。

「第四。ふたたび、動物の姿がはるかな背景にあらわれ、わずかな声をたてた。私はふたたびこれを認めることを拒んだ (Again the vision of the beast far in the background, with faint voice. Again refusal to acknowledge)。

「第五。もう一度、動物の姿があらわれたが、それは、待ちのぞむような目つきでみていた私の目の幻像に過ぎなかった。そこで、私はふたたび拒んだ (Once more the vision, but only of my eyes

with this longing look; and again the refusal)。それから、私は魂であり、神の完全な^{みこころ}思想^{あらわれ}の表現なのだから、完全に健康であり、また常に健康であったのだ、という確信、内的意識が生まれた(Then came the conviction, the inner consciousness, that I was perfectly well and always has been, for I was Soul, an expression of God's Perfect Thought)。それは、私にとって、本来の私と、外見上そう見えていた私との完全な分離がおこなわれたことであった(That was to me the perfect and completed separation between what I was and what I appear to be)。このことがあってから、私は私の真の存在を見失うことなく、たえずこの心理を肯定しつづけて、次第次第に(二年間の苦しい努力の末にたどりついたのだが)(I succeeded in never losing sight after this of my real being, by continuously affirming this truth, and by degrees [though it took me two years of hard work to get there]) 私は、私全身の健康を永続させるにいたった。(James, 梶田訳 1969: 162-163.)

『天路歷程』は、キリスト教徒としての作家ジョン・バニヤンが主人公クリスチャンを巡礼にたとえて宗教的な経験が苦しみをともないながら、いかに自らを変容させていったかを描いた一人称の小説である(Banyan 1678)。上記の記述においてジェイムズは、同様に、鬱病患者の治療プロセスを「踏み石」を踏んでゆくような諸段階として引用している。

本稿第1節で引用した『お気に召すまま』第二幕第一場に続く台詞では、傷ついた四本足の鹿、それを嘆く貴族のジェイクイズ、その様子を語る貴族1、そのエピソードに問いを投げかけ川辺の全体的な状況を概観するとともにジェイクイズの話を聞きに駆けつけようとする老公爵という多層な視点が示される。

老侯爵：では鹿狩りに出かけるとするか。それにしてもこの胸が痛む、道化のまだら服に似た毛並みのあの^み哀れな獣どもは、この荒れ地の都に生まれ住む住民でありながら、自分の領土でその肥えた尻を二股の矢に射抜かれなければならないのだ。

貴族1：実は公爵、あの鬱ぎ屋のジェイクイズもそれを嘆きまして(略)この森のなかをさざめき流れる小川に年へた根をのぞかせているあの樫の木のところ。たまたまそこに、狩人の矢に狙われて傷を負ったあわれな雄鹿(a poor sequestered stag)が群れを離れてただ一頭、足を引きずってやってまいり、苦しみもだえはじめたのです。かわいそうに、その雄鹿はふりしほるようなうめき声(groans)をあげました、うめくたびにまだらな皮の衣は張り詰めて裂ける(Almost to bursting)かと思われ、丸い大粒の涙(the big round tears)は両目からこぼれて罪のない鼻面を伝い、次々に前の滴を追うのもあわれを誘います。こうしてその愚かな獣は、鬱ぎ屋のジェイクイズに見つめられながら、速い流れの水際に立ち、涙でその水かさを増すばかりでした。

老侯爵：ジェイクイズはなんと言った？その光景を見て教訓めいたことばを吐いたろう？

貴族1：それはもう、何百ということばを並べたてました。まず流れにむなしく涙を注ぐことについては、「あわれなやつ」と申します、「おまえの形見分けは俗物どものやりかたと同じだ、ありあまるところにさらに与えているのだ」と。次にただ一頭、ビロード毛の仲間から見捨てられたことについては、「もっともだ」と申します、「みじめな境遇にあれば仲間はずれにされるのだ」と。やがて鹿の一群れが、牧草に膨れてのんびり通り過ぎ、その雄鹿にあいさつもしないのを見て、「ああ」と彼は申します、「さっさと行くがいい肥えて脂ぎった町人ども、これが世の習いだ、あわれにも打ち砕かれた破産者などいちいち目に止めることはない」と(wherefore do you look upon that poor and broken bankrupt there?)。このようにジェイクイズは激しい毒舌をもって、国家を、都市を、宮廷を槍玉にあげ、さらにはここでの私たちの生活にまで(すべて突きさし通して[pierceth through], 補足筆者)毒づく始末です、われわれは篡奪者、暴君だ、いやもっと悪らつた、獣どもと自然から授かったその居住地においておびやかし、殺しさえしているのではないかと。(略)

老侯爵：あの男をその瞑想にふけらせたままもどったのだな(And did you leave him in this contemplation)。

貴族1：はい、むせび泣く鹿を見ながら涙を流し、なにごとかつぶやくまに（We did, my lord, weeping and commenting Upon the sobbing deer）。

老侯爵：そこに案内してくれ。憂鬱にとりつかれているあの男と議論するのがわしは大好きだ。そういうときこそあの男は実のあることを言うのだな。
（Shakespeare, 小田島訳 1983c: 43-47）

そもそも聖地サンティアゴが聖ジェイムズ（ヤコブ）のスペイン語表記であるようにジェイクィーズも時計人形としてのジャックやジェイムズのフランス語読みとして、ジェイムズ自身が自己同一化をはかる対象となりうる（小川〔西秋〕2021）。

このように、ウィリアム・ジェイムズの宗教的経験の分析においても、『お気に召すまま』の影響がみられることを論述した。ウィリアム・ジェイムズにとって、「意識の流れ」においてしばしば立ち上がる観念存在としてのペルソナである「スペードのジャック」は重要であるが十分に説明は尽くされていない（James 1890, 1892）。本稿における試行によって、サンティアゴ・デ・コンポステラとジェイクィーズの二者は「ジャック」というジェイムズ思想におけるキーワードの由来を解明する一助となると考えられる（小川〔西秋〕2021）。

また、すでに論じてきた『リチャード2世』の主人公である実在した王リチャードは、つぎに示す2枚の図版にみられるように鹿と深いかかわりをもつ。図1は1618年出版の



図1 リチャード2世の肖像（Forker 2002: 2）



図2 リチャード2世のエンブレムとしての白鹿 (Forker 2002: 132)



書籍に挿絵としてかかげられているリチャード2世の肖像画である。その下部の両脇には本稿第2節でふれたリチャード王の太陽以外エンブレム、すなわち、紋章、図像として2匹の鹿が横たわっている構図となっている。さらに、図2には現在のイギリスのナショナル・ギャラリーに所蔵されている木製パネルに描かれた白鹿が首に王冠をつけている様子がみてとれる。すでに引用したウィリアム・ジェイムズの宗教的な経験は、女性の患者の症例とされているが、実はジェイムズ自身の実体験のようである (James, 榊田訳 1969)。これまで論じてきたように、そこにあらわれる四本足の動物とリチャード2世、そして『お気に召すまま』で話題となる瀕死^{ひん}の鹿が容易に「アソシエーション」の財源となる時代を、ジェイムズは生きていたといえよう。

結：プラグマティズム研究をめぐる2つのバイアスとその対応

本稿における筆者の取り組みは、プラグマティズムをめぐる近年再活性化してきた諸研究にみられる2つの認知的バイアスを是正するためのものである。そのバイアスとは、第一に、「通史」記述というスタイルに起因する。第二に、デジタル・ヒューマニティーズという用語に代表されるような、アーカイブやAIを駆使したデータ活用にかかわるものである。

まず、第1のバイアスは、1870年代から2020年代に至るプラグマティズムの潮流をた

どる記述にみられる。プラグマティズムについての学術的な評価は、その間一貫して高かったわけではない。そのうえ、プラグマティズムを専門として研究する学術機関や学者が常に存在していたということもない。それゆえに、プラグマティズムに関する周辺研究の掘りおこしを歴史、文学、教育研究者たちがおこなう一方で、心理学からのアプローチは稀であったと考えられる（Kuklic 2020; Menand 2011）。

そのような状況下で集積された研究の多くは、幅広い読者を獲得する出版上の要請もあるためか、プラグマティズムに関わる思想家たちを時代順に列挙し、その研究内容を抄訳するというスタイルがとられてきた。このような「通史」は、研究トピックの広がりや変遷を網羅的にカバーする一方で、研究者個人のなかでの思想の変容や当時使用された用語のもつ独特な含意といった要素を捨象する結果をひきおこしていると考えられる。

第2のバイアスとはいうと、それは、第1の「通史」記述の実践にまつわるバイアスと密接に関連している。現在の人文科学において、ビッグデータの蓄積とAI分析は、研究資金の獲得においても必須の条件となっている。しかしながら、プラグマティズムが19世紀から20世紀をまたいで発展し、応用された時代においては、対面的な、限られた人材によって構成された「サロン」（今橋・井上編 2024）における交流や対話が重要な役割をになっていた。例えば、ウィリアム・ジェイムズやチャールズ・サンダース・パースらが参加していたマサチューセッツ州ケンブリッジの「メタフィジカル・クラブ」やジョン・メイナード・ケインズやヴァージニア・ウルフたちがつどっていたロンドンの「ブルームズベリー・グループ」などである。最もプラグマティズムの発展に寄与したであろうとみられる口頭のやりとりは、実際には資料としてもはや存在しておらず、ジェイムズとその弟で小説家のヘンリー・ジェイムズが対面でかわした意見交換も今となっては推測せざるをえない。

その一方で、文学や古文書のデータベース利用は論文作成や学術雑誌掲載において必須の学術的な要件ともみなされるようになってきている。しかしながら、例えば、個人宛の書簡が社交上の辞礼や追従を述べていたとしても、そのバイアスについて検証する試みはまだ十分になされてはいない。とりわけ、ウィリアム・ジェイムズ研究においては、前出のヘンリー・ジェイムズが自身に宛てられた書簡や蔵書をすべて処分してしまったという事情を考慮する必要がある。さらに、ジェイムズの発想の根幹にあると筆者が考える『心理学要綱』は、一般むきにやさしく書き直されたと認識され、学術的な分析対象としては軽視され除外される傾向もみられる（Misak 2016）。

以上のようなプラグマティズム研究の偏向にみられる2つのバイアスを回避すべく、本稿では、主としてウィリアム・ジェイムズが校正を重ねたのちに出版された著作を書簡を参考に丁寧にたどった。それとともに、そこで使用されている用語の含意を、ジェイムズが経験した時代的コンテクストに立ち戻って考察した。そこで指摘しておかなければならないのは、ジェイムズが、英国の戯曲家ウィリアム・シェイクスピアの名作に親しみ、しかし彼なりの信念とバイアスをもってたえず依拠しつつけることになるという見解である。通常のAI分析とはことなる、リズムの強弱とめりはりを意識した方法で、本稿はジェイムズの言説がつくりだす宇宙にみられるデザインにアプローチしてきた。

結論を述べるならば、ウィリアム・ジェイムズのたどった思考の軌跡は、第1節で述べたウィリアム・シェイクスピアの戯曲とともにあるといえる。そこでは、2, 3の傾向が顕著にみられる。第一に、同時代の他の知識人の家庭でも教養教育の一環として行われていたように（Shapiro 2020）、いわゆるシェイクスピア作品のなかでも暗唱用に多用される独白や名スピーチに対する嗜好がみられる。それらは、好事家や研究者が興味をもつような専門的な台詞ではなく、いわゆる一般大衆が好んで口誦するような種類の台詞群である。このようにアメリカ市民の印象に残る文言をジェイムズも朗読し、暗記しひいては彼

自身の文体に影響を残していると考えられる。

第二に、シェイクスピア作品にみられる独白のなかでも、エリザベス朝において流行の気質や病氣とされた、主要人物たちの憂鬱さに満ちた心情を吐露する台詞がジェイムズの興味をひいているようである。1879年にシカゴで上演された『リチャード2世』の主演を演じたエドウィン・ブースは、ハムレット役やマクベス役の演技でも知られている (Sontag 2016)。また、当時の批評や戯曲の出版物においても、シェイクスピア作品間の連関が語られることは常であった。ジェイムズがそういった出版物に目を通していただろうことは想像にかたくない。さらに、アメリカ南北戦争後の1879年にグリーンバックスという不換紙幣に関してペイヤー議員が議会通過させた決議の施行は、人の気分やプライドだけでなく紙というモノがもつ現金価値をも上下に変動させる効果をジェイムズに実感させたと解釈できるだろう。

最後に、本稿で引用してきた以外にもウィリアム・ジェイムズ自身の言説とそれらの出典となったと考えられるウィリアム・シェイクスピアの戯曲には、歴史的な事実、とりわけ、アイルランドやスコットランドに言及したものが多くという特徴がみられる。歴史劇にみられるアイルランド遠征やスコットランドを舞台にした設定、あるいはアメリカ南北戦争 (the Civil War) と同じつづりをもつ数々の内戦 (Civil Wars) は、とりわけ、ジェイムズの関心を引いたようである。この点については、今後別稿においてまた言及することとする。

● 参考文献

- 有馬道子, 2014=2022, 『パースの思想』, 岩波書店.
- Bunyan, John, 1678, *The Pilgrim's Progress: From This World, to That Which is to Come*, Nath, Ponder.
- Crystal, David, 2015, *Oxford Illustrated Shakespeare Dictionary*, Oxford University Press.
- Forker, Charles, R., 2002, "Introduction", in William Shakespeare, *King Richard II*, The Arden Shakespeare: Third Series, Bloomsbury, pp.1-169.
- 今橋映子・井上健編, 2024, 『比較文学比較文化ハンドブック』, 東京大学出版会.
- James, William, 1890, *The Principles of Psychology*, Henry Holt and Company.
- James, William, 1892, *Psychology: Briefer Course*, Henry Holt and Company.
- James, William, 1902, *The Varieties of Religious Experience*, Longmans, Green & Co.
- James, William, 1907, *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, Dover Publication.
- James, William, 榊田啓三郎訳, 1957, 『プラグマティズム』, 岩波書店.
- James, William, 榊田啓三郎訳, 1969, 『宗教的経験の諸相 上』, 岩波書店.
- James, William, 今田寛訳, 1993, 『心理学 下』, 岩波書店.
- 紀平英作, 2022, 『アメリカ奴隷解放史』, 岩波書店.
- Kuklick, Bruce, 大塚諒・入江哲朗・岩下弘史・岩本智典訳, 2020, 『アメリカ哲学史：一七二〇年から二〇〇〇年まで』, 勁草書房.
- Menand, Louis, 野口良平・那須耕介・石井素子訳, 2011, 『メタフィジカル・クラブ』, みすず書房.
- Misak, Cheryl, Jayne, 2016, *Cambridge Pragmatism: From Peirce and James to Ramsey and Wittgenstein*, Oxford University Press.
- Misak, Cheryl, Jayne, 2020, *Frank Ramsey: A Sheer Excess of Powers*, Oxford University Press.
- 中村甚五郎, 2011, 『アメリカ史「読む」年表辞典 2：19世紀』, 原書房.
- Oates, Stephen, B., 高島敦子訳, 2022, 『何人にも悪意を抱かず』, 新評論.
- 小川 (西秋) 葉子, 2021, 「集合的生命前史：グローバリゼーションを〈転調〉する」, 一橋大学大学院社会学研究科博士学位論文.
- 小川 (西秋) 葉子, 2023b, 「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイズム, パーク, ゴフマンを中心に」, 日本社会学会第96回大会テーマセッション「『時間の社会学』と社会学的時間批判」報告, 立正大学, 2023年10月8日.
- 小川 (西秋) 葉子, 2023a, 「特集2：グローバリゼーションと持続可能なメディアのデザイナー意識とモビリティーズ」, 『メディア・コミュニケーション』73：n. p..
- 小川 (西秋) 葉子, 2024, 「特集：グローバリゼーションと持続可能なメディアのデザイナー意識とモビリティーズ2」, 『メディア・コミュニケーション』74：1-7.
- オウイディウス, 中村善也訳, 1981, 『変身物語』, 岩波書店.
- 歴史学研究会編, 2017, 『世界史年表第3版』, 岩波書店.
- Shakespeare, William, 河合祥一郎訳, 2003, 『新訳 ハムレット』, 角川書店.

- Shakespeare, William, 小田島雄志訳, 1983c, 『お気に召すまま』, 白水社.
- Shakespeare, William, 小田島雄志訳, 1983b, 『リチャード二世』, 白水社.
- Shakespeare, William, 小田島雄志訳, 1983a, 『尺には尺を』, 白水社.
- Shakespeare, William, 2016e, "All's Well That Ends Well", in Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan eds., *William Shakespeare The Complete Workes: Modern Critical Edition, The New Oxford Shakespeare*, Oxford University Press, pp.2275-2346.
- Shakespeare, William, 2016d, "As You Like It", in Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan eds., *William Shakespeare The Complete Workes: Modern Critical Edition, The New Oxford Shakespeare*, Oxford University Press, pp.1693-1755.
- Shakespeare, William, 2016c, "Measure for Measure", in Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan eds., *William Shakespeare The Complete Workes: Modern Critical Edition, The New Oxford Shakespeare*, Oxford University Press, pp.2199-2269.
- Shakespeare, William, 2016b, "The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark", in Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan eds., *William Shakespeare The Complete Workes: Modern Critical Edition, The New Oxford Shakespeare*, Oxford University Press, pp.1997-2099.
- Shakespeare, William, 2016a, "The Tragedy of Richard the Second", in Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan eds., *William Shakespeare The Complete Workes: Modern Critical Edition, The New Oxford Shakespeare*, Oxford University Press, pp.851-922.
- Shapiro, James, 2020, *Shakespeare in a Divided America*, Penguin Press.
- Sontag, Susan, 木幡和枝訳, 2016, 『イン・アメリカ』, 河出書房新社.
- Twain, Mark, 1873, *The Gilded Age: A Tale of Today*, American Publishing Company.
- Wahl, Jean, 水野浩二訳, 2010, 『具体的なものへ：二十世紀哲学史試論』, 月曜社.

小川（西秋）葉子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所専任講師）